(1)		(2)	(3)			(4)	
㋐	㋑		㋐	㋑	㋒	A	B
お父さん	一こずつ	ハルヒ	二十	五	のこり	一	十二

［かいせつ］

（1）本文に、「そうね。～おやつは、お父さんが仕事で東京へ行ったときの、おみやげでいいかしら。」と、「おかしは、一こずつ、ふくろに入っています。」とある。

（2）本文に、「『うん。あまりが出ると思う。』と、ハルヒは言いました。」とある。会話文になっているときは、だれが話している言葉なのかを、考えながら読むとよい。

（3）次の二つの、お母さんの言葉からさがす。

・「お母さんなら、はじめにおかしを、二十こと五こに分けるかな。」

・「二十五こっていうことは、十こが二つでしょう。二人で十こずつ分けられるじゃない。その後で、のこりの五こを、二人で分ければいいのよ。」

（4）お母さんが、二十五このおかしを、二人で分けたときに、一人分が、なんこずつになるかを話している。

まず、二十五を、二十と五に分ける。

←

二十を二でわると、十になる。
五を二でわると、二になって、あまりが一。

←

一人分は、十と二をたして、十二になる。

(1)

㋐ 二十五こ

㋑ 二人

㋒ どうなるか

(2)

A

他の人にも分けて、みんなでたくさんの友だち

B

に分けて、みんながよろこんでくれるほうが、楽しい。でも、たくさんの友だちに分けると、自分の分がへるから、ざんねん

[かいせつ]

(1) 本文に、「マイのお父さんのおみやげの、二十五このおかしを、二人で分けたらどうなるかを考えた後、おやつを食べ始めました。」とある。

(2) A「おすそ分け」は、マイのお母さんが言った言葉なので、お母さんの言葉の中からさがす。

B おすそ分けについて、「たくさんの友だちに分けて、みんながよろこんでくれるほうが、やっぱり、楽しい」という気持ちと、「たくさんの友だちに分けると、自分の食べられる分がへるから、ちょっとざんねん」という、マイの二つの思いを読み取る。

(1)	マイの	お父さん	が、仕事で東京へ行ったときの	おみやげ
(2)	ハルヒ			
(3)	イ			
(4)	A	十		
	B	十二		

［かいせつ］

(1) 本文に、「そうね。～おやつは、お父さんが仕事で東京へ行ったときの、おみやげでいいかしら。」とある。

(2) 本文に、「『うん。あまりが出ると思う。』と、ハルヒは言いました。」とある。会話文になっているときは、だれが話している言葉なのかを、考えながら読むとよい。

(3) 本文に、「お母さんなら、はじめにおかしを、二十こと五こに分けるかな。」とある。

(4) お母さんが、二十五このおかしを、二人で分けたときに、一人分が、なんこずつになるかを話している。

まず、二十五を、二十と五に分ける。

←

二十を二でわると、十になる。
五を二でわると、二になって、あまりが一。

←

一人分は、十と二をたして、十二になる。

(1)			(2)			
A	B		㋐	㋑	㋒	㋓
マイのお母さん	㋐ 他の人	㋑ 楽しむ	たくさんの友だち	よろこんで	自分	へる

［かいせつ］

（1）A「おすそ分け」は、マイのお母さんが言った言葉（ばぁ）である。

B　本文に、「他（ほか）の人にも分けて、みんなで楽しむっていうことよ。」とある。

（2）おすそ分けについて、「たくさんの友だちに分けて、みんながよろこんでくれるほうが、やっぱり、楽しい」という気持（も）ちと、「たくさんの友だちに分けると、自分の食べられる分がへるから、ちょっとざんねん」という、マイの二つの思いを読み取（と）る。

①	②	③	④	⑤
マイ	二、三、四	十二人を、二人一組にして考える。	九九が使える から。	二こ

［かいせつ］

※このように、会話文がつづく場合は、「　　」は、だれが言った言葉なのかを、たしかめながら読むとよい。

(1)「ありがとう。～一人一こずつ分けると、たくさんあまるから、一より大きな数になるはずだね。」は、マイの言葉。

(2) ここまでの話は、五十このおかしを十二人で分けたとき、一人、なんこずつになるかという話である。
マイは「一より大きな数」と言っていて、ハルヒは「五より小さい数」と言っている。
つまり、□に入る数は、一より大きく、五より小さい数であることが分かる。

(3) マイのお母さんの言葉に、「それなら、十二人を、二人一組にして考えてみるのは、どうかしら。」とある。

(4) 十二人を、二人一組にして考える、というお母さんの考えを聞いた後、マイが、「それなら九九が使える。」と言っている。

(5) 最後のマイの言葉に、「そうだね。でも、二人一組だから、一人分は、四こだね。あまった二こは、お母さんにあげるね。」とある。

①	②	③	④	⑤
友だちとピクニック に行く	二、三、四	十二人を、二人一組にして考える。	ウ	四こ

［かいせつ］

※このように、会話文がつづく場合は、「　　」は、だれが言った言葉なのかを、たしかめながら読むとよい。

(1) 本文に、「うん。～ねえ、お母さん。来週の日曜日に、友だちとピクニックに行くでしょ。～」とある。

(2) ここまでの話は、五十このおかしを十二人で分けたとき、一人、なんこずつになるかという話である。
マイは「一より大きな数」と言っていて、ハルヒは「五より小さい数」と言っている。
つまり、［A］に入る数は、一より大きく、五より小さい数であることが分かる。

(3) マイのお母さんの言葉に、「それなら、十二人を、二人一組にして考えてみるのは、どうかしら。」とある。

(4) 十二人を、二人一組にして考えるので、十二を二でわればよい。

(5) 最後のマイの言葉に、「そうだね。でも、二人一組だから、一人分は、四こだね。あまった二こは、お母さんにあげるね。」とある。